

広島大学 グローバルインターンシッププログラム NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム(G.ecboプログラム)
—10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

2025年3月

第24号 Vol.17 最終号

目次:

G.ecboグローバルインターンシップ活動の回想	1-2
派遣国実績	2
学生派遣実績, 2024年度活動報告	3
i-ECBO/G.ecbo プログラム過程修了後の進路先アンケート結果	4
帰国レポート	5-10
2024年度派遣学生一覧	10
海外インターンシッププログラム(G.ecboプログラム)の歴史の変遷	11
運営委員会体制, G.ecboプログラム終了のご挨拶	12



G.ecboプログラムとは？



グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指すプログラムです。

G.ecboグローバルインターンシップ活動の回想 —Global Explorers to Cross Borders—

21世紀に入ろうとしているところ、日本経済の低迷、社会の閉塞性などのため、内向きになっている状況を打破する人材育成する目的として大学の教育において「インターンシップ」の必要性に注目を浴びるようになった。文部科学省は、インターンシップとは「在学中の学生が自らの専攻や将来のキャリアに関連する就業体験を、指導を伴い行うこと」としている。本学においても法人化を機に、積極的にインターンシップを導入するようになった。社会が学生に求める資質の変化、経済状況、就活スケジュールの変容などの要因によりインターンシップの形態が多様化し、その実施が拡大した。

地球を視野に教育研究を実施し、国際的に活躍できる人材育成することを目指す本学において2001年度から海外インターンシップが開始された。

G.ecboの歴史の変遷は後述する(p.11参照)。

国際的感覚を身に着け、地球を視野に内外に活躍できる人材育成の観点から体験型インターンシップを主眼に始めたこのプログラムは、対象は大学院生であるため、この経験を研究にも活用できることからそれを目的とする応募者も多く研究推進型インターンシップが増え、近年両者を折衷するインターンシップが多くなっている。

事前研修では、インターンシップ実施中、派遣先において以下のことを心得、固く守るように指導を続けている。1)先方の負担が最小限になるよう計画通り研修を行う、2)先方に対してできる貢献は進んで実施する、3)先方に広島大学を紹介し、その特徴を伝えられるように勉強する(大学の理念、憲章、行動範囲、ビジョン、広大生としての自らの理念、本インターンシップにおける目的、ビジョンなどを伝えられるように)、4)広島大学から派遣されていることを肝に銘じ、その代表者 ambassadorとして個人・機関間のgood willを醸造するように努める。



MAHARJAN, Keshav Lall

G.ecboプログラム運営委員長
大学院人間社会科学部
国際経済開発プログラム 教授
国際連携サステナビリティ学専攻 教授
大学院スマートソサイエティ実践科学研究所
Social Innovation Science領域 教授

(2頁へ→)

(1頁より)

2005年以来20年間G.ecbo/i-ECBOで学生を派遣した国は、30か国にもものぼる(p.2参照)。G.ecboニューズレターにおけるOB/Gの投稿記事からは、これらの国々に派遣され、G.ecboプログラムを終了した学生たちが、国内外において第一線に生き生きと活躍されていることを知ることができる。そこから就活から就職後職場での仕事、人間関係等においてG.ecboによるインターンシップの経験が非常に役立ったと強調されている。事実、毎年本プログラムの応募者面接や事前研修発表において、学生の派遣に対して不安を感じることはしばしばあったが、インターンシップを終え、帰国後事後研修発表では見違えるように振る舞い、自信たっぷりに充実した内容を発表する学生を多く見てきた。私は、i-ECBO/G.ecboの運営に約20年間関わってきた中で、大学のシステム上評価はされにくい、こうした学生の成長ぶりを実感し満足することがしばしばあった。

20年間、G.ecbo/i-ECBOの運営に携わり見える課題もある。予算的支援があったときは盛んに活動することができたが、その後献身的な教員以外は関心を持たれない。教育/国際両方の側面を持つ本プログラムは、時世によって属する組織が振り子のように変わり、全学的なプログラムでありながらそのように認知されていない。また本プログラムの特徴はわかりにくく外部から知る由もないため、教員が評価される制度もなく、運営に携わる教員も限定的であった。

以上の課題を克服し、今まで以上に上述した本学の理念・ビジョン・国際化の方針に沿うように学生を育成するには、プログラムのスケールアップ、制度設計の見直しが必要である。これにより本海外インターンシッププログラムが国際レピュテーションに一役を担う重要なプログラムになることを望んでいる。

G.ecboプログラム運営委員長
マハラジャン、ケシャブ・ラル

～世界に広がる派遣国実績～



2005年以来20年間G.ecbo/i-ECBOで学生を派遣した国は下記の通り、計30か国にも到達しました。

派遣国一覧)

インド、インドネシア、英国、オーストラリア、ガーナ、カナダ、韓国、カンボジア、ケニア、コートジボワール、ザンビア、スイス、スリランカ、セネガル、タイ、台湾、中国、日本、ネパール、バングラデシュ、東ティモール、フィリピン、フランス、米国、ベトナム、ボリビア、マラウイ、マレーシア、ミャンマー、ロシア (50音順)



世界地図でみる派遣国の実績一覧

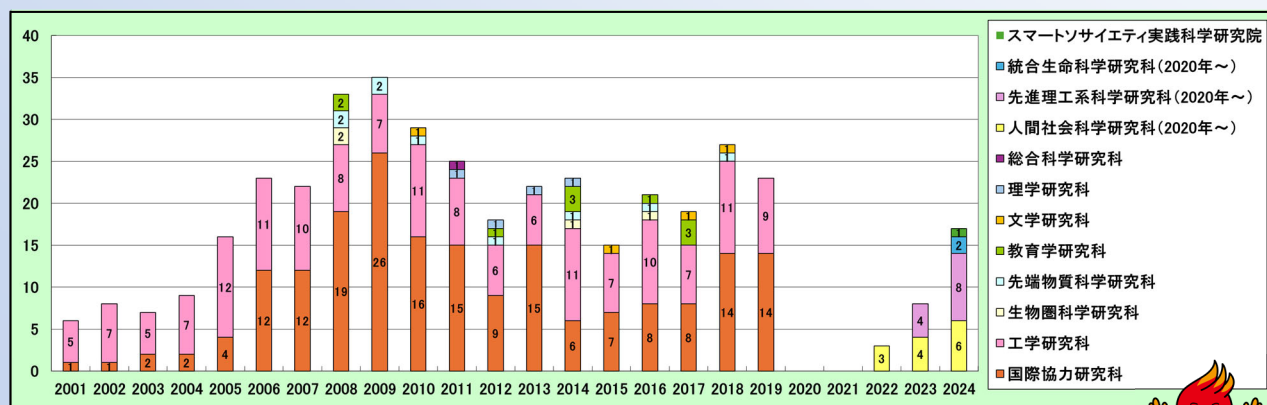
★学生派遣実績について

G.ecboプログラムは2007年に全学化され、18年の歴史を持ちます。その前身であるECBO(旧工学研・専門ECBO)やi-ECBO(旧国際研・専門ECBO)時代を含め、総勢409人を世界へ輩出してきました。

(内訳):工学研ECBO(174名), 国際研i-ECBO(75名), G.ecbo(160名(海外148名+国内12名))

※ECBO共同研究178名は除く)

各研究科毎の年度別派遣実績は、下記グラフの通りとなりました。新型コロナウイルス流行により派遣中止となった2020、2021年度以降より派遣実績が一時的に低下したものの、2024年度には冬季派遣実施者2名+派遣予定者3名(2025年3月3日時点)を含め計17名が海外インターンシップを実施しました。



年度別 海外インターンシッププログラムの派遣実績 (人)
(2001年～2024年)



2024年度活動報告

- 4月1日** 2024年度派遣学生の公募を開始しました
- 4月23日** G.ecbo海外インターンシップ・遡上教育型インターンシップの募集を締め切りました
- 5月17日** 2024年度派遣選考面接を行いました
- 5月23日** インターンシップ審査・結果通知をしました
- 5月24日** 英語プレゼンテーション研修ガイダンスを行いました
- 6月5日** 第1回英語プレゼンテーション研修を行いました
- 6月28日** 第2回英語プレゼンテーション研修を行いました
- 7月22日** 第3回英語プレゼンテーション研修を行いました
- 8月18日** 現地渡航・インターンシップを開始しました
- 9月27日** G.ecboプログラム運営委員会を開催しました
- 10月1日** 2024年度冬期派遣学生の公募を開始しました
- 10月22日** G.ecbo・遡上教育型インターンシップの冬期募集を締め切りました
- 12月13日** 夏期派遣生帰国報告会・冬期派遣生事前英語プレゼンテーション研修を行いました
- 1月10日** 冬期派遣生事前英語プレゼンテーション研修を行いました
- 3月26日** G.ecboプログラム運営委員会を開催しました

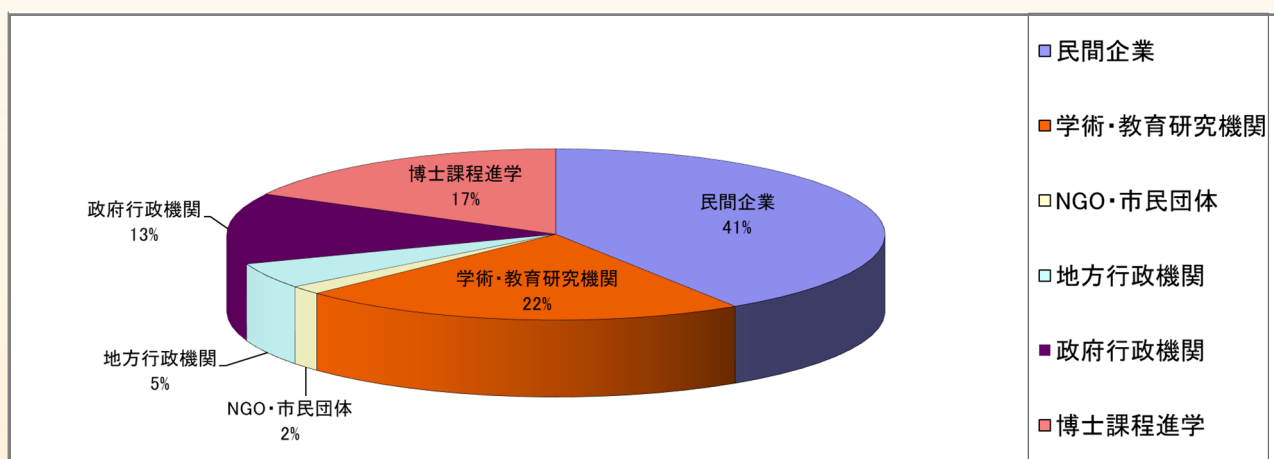
i-ECBO/G.ecbo プログラム過程終了後の進路先アンケート結果

2006年度にi-ECBOプログラムで学生を派遣して以来、i-ECBO/G.ecboプログラムを修了した学生の進路先について、約19年にわたって調査・集計を実施しました。

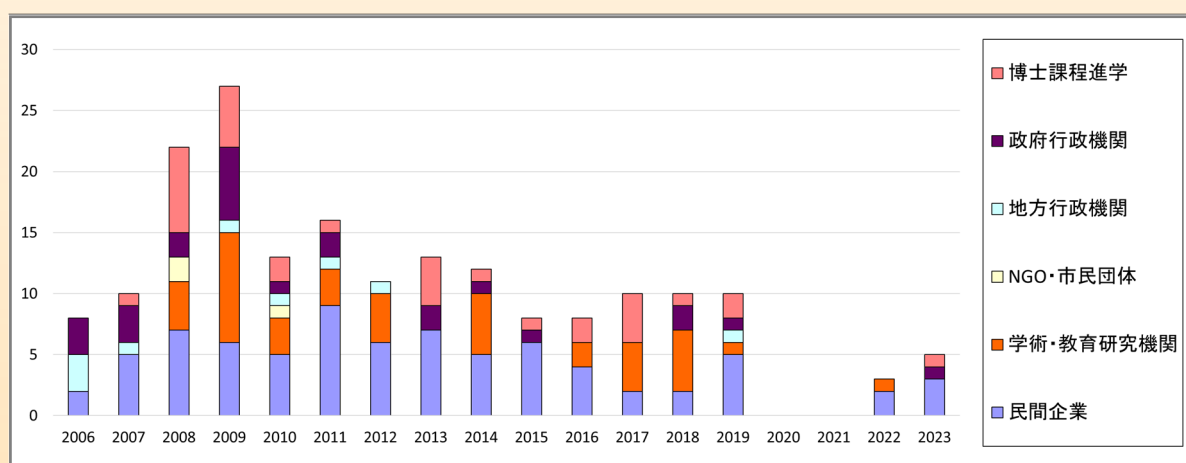
<進路先の分類>

- *民間企業・・・日本国内/海外における民間企業への就職
- *学術・教育研究機関・・・教員, 研究生・科目等履修生, その他学術研究機関への就職・進学
- *地方行政機関・・・日本国内/海外における地方公務員等への就職
- *政府行政機関・・・国家公務員, 国際機関等への就職
- *博士課程進学・・・広島大学を含め, 国内外の博士課程への進学

2023年度までの集計結果は下図円グラフの通り、民間企業が41%、学術・教育研究機関が22%、NGO・市民団体は2%、地方行政機関は5%、政府行政機関は13%、博士課程進学は17%という結果となりました。
各年度別の進路先内訳は下図棒グラフの通りです。



G.ecbo プログラム過程修了後の進路先内訳
(2006～2023年度派遣学生)



年度別 G.ecbo プログラム過程修了後の進路先内訳
(2006～2023年度派遣学生) (人)

※進路先とは、広島大学修了直後の進路先を指し、転職・退職者や進路未定者については集計しないものとする

※博士課程進学とは、博士課程進学後国際機関や教員等に就職した場合や、博士課程進学後帰国または退学した者を含むものとする

※2020、2021年度についてはコロナウイルス流行により海外派遣中止のため集計なし

※2024年度派遣学生については進路先未定のため集計なし

2024年度 インターンシップレポート

福田 竜也/ FUKUDA Ryuya

先進理工系科学研究科/博士課程前期/量子物質科学プログラム

Host	グリフィス大学 量子動力学センター (オーストラリア)
Period	2024年 3月 7日 - 5月 11日
Objectives	量子力学分野におけるエンタングルメントソースの組立, 単一光子生成技術の学習



ー派遣先・現地での生活について

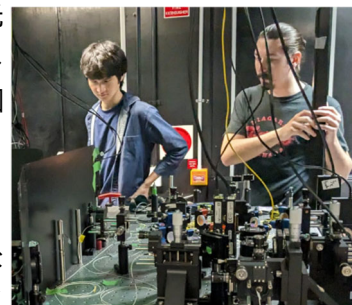
派遣先の研究メンバーはオーストラリアだけでなく、メキシコ、アメリカ、インド、イタリアのように様々な国籍の人が集まっています。みんなとてもフレンドリーで優しく接してくれました。また、人によって英語の発音に母国語の訛りがあったり、お昼に持参した弁当にそれぞれの国の個性が現れていて面白いと思いました。見たことがない食べ物については、よく味見させてもらっていて各国の本場の味や食文化の違いを実際に体験できたと思います。研究だけでなく、様々な人との交流を通して各国の文化の違いを感じたり、新しいことにチャレンジできる多くの機会も得ることができました。

ー研修内容について

量子力学にはエンタングルメントといって、2つの量子(光子や電子など)の間で強い相関を示す現象があります。僕の研修内容は相関を持った光子対を生成するためのセットアップを組み立てることでした。

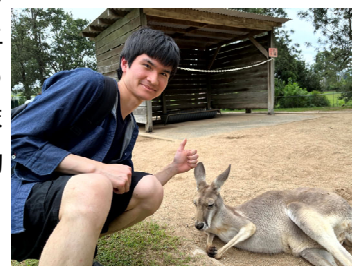
派遣されてから1週間ぐらいは論文を読んだり、周りの人に聞いてセットアップを理解し、2週目以降はドクターの学生と協力しながら実験室でソースの立ち上げをしていたという感じです。実験で使う光学素子はある程度取り扱った経験がありましたが、グリフィスの実験室は広島大学の実験室の3倍くらい巨大で、中には初めて取り扱う設備などもありました。特に、超伝導ナノワイヤー単一光子検出機という世界でも有数の超高性能な検出機があるのですが、それを実際に使って実験ができたのはとても貴重な経験になったと思います。

ソースの立ち上げでは、光学素子や光子対を生成するための結晶に対して真っ直ぐレーザー光を入射することが、光子の生成効率を上げるためにとても重要となるのですが、そのためのレーザー光の角度の調整が一番大変でした。イメージとしては、裁縫する時の針穴に糸を通す作業の100倍くらい難しい感じです。1日中やっても光子の検出数が毎秒100個いかない時もあり、心が折れかけた時もありましたが、研究室メンバーやスーパーバイザーのアドバイスもあって、最終的に自力で毎秒8000~10000個生成できるようになった時はとても嬉しく、研究室メンバーと喜びを分かち合いました。



ーこのインターンシップで一番得たもの

多くの人との繋がりを通じて、新しいことにチャレンジしてきた「経験」です。見たことがない場所を訪れてみたり、カンガルーとコアラをどうしても見たかったので自然保護区に行く計画を自分から立ててメンバーを誘ってみたりなど、新しいことに挑戦するには想像以上の勇氣が必要ですが、達成できた時に得られた経験は人生の中でかなり大きなものになったと思います。また、新しいことを挑戦する上で人との繋がりは重要になったと思います。道に迷ったり実験で上手くいかないことがあっても、1人で抱え込まず周り相談し助けてもらうことで、解決の糸口を見つけることに繋がったと思います。



ーインターン経験を今後どのように生かしていきたいですか？

この経験を通じたことで、新しいことに積極的にチャレンジしたり、何かトラブルが起きても動揺せずに対処できるようになったと思います。また、研修で身につけた世界最先端の単一光子生成技術や知識を生かして、今後の自身の研究をより改善することに繋がっていきたいです。僕は今、ドクターに進学することを考えているため、今後は国際学会に参加し発表するという機会が出てくると思います。1人で見知らぬ土地を訪れ、海外の研究者と交流するような状況でも、今回得た経験や知識があることで、どんなトラブルがあろうが落ち着いて乗り越えていけるのではないかと感じています。



2024年度 インターンシップレポート

久富 紫音 / HISADOMI Shion

統合生命科学研究科/博士課程後期/生物資源科学プログラム

Host	アルバータ大学（カナダ）
Period	2024年 8月 19日－9月 24日
Objectives	畜産学および酪農に関する知識を習得する。農場等を訪問し、環境問題に対する意識について聞き取りを行うとともに、現地学生と意見交換を行う



－派遣先・現地での生活について

カナダの人々はのんびり、ゆったりと自分のペースで生活し、自然環境を大切にする人が多く、オフィス街であっても常に緑がたくさんありました。普通の住宅街でも、リスや野ウサギ、コヨーテを見ることができます。一方で、ショッピングセンター、飲食店や公共交通機関などは非常に発達しており、先進国としての側面を感じることもできます。現地では、大学までバスと電車で20分くらいのカナディアンの方にホームステイさせてもらっていました。週末は博物館やショッピングモールなど、ステイ先の家族や友人と少し遠出をして楽しみました。食事は朝と夜は家の人が作ってくれたものか自炊、昼は大学で食べていました。カナダは移民がとても多い国という背景があるためか、英語の話し方や住人の宗教、文化に対する意識など非常に寛容のように感じました。

－研修内容について

アルバータ州に到着して最初の1～2週間は農場の視察を行いました。アルバータにある飼料会社で働く日本人の方に、様々な規模の農場を案内していただきました。ここでは今回の研修の目的の1つでもある、「日本との違いを見つける」を念頭に、じっくり視察することができました。また、自分の言葉で農家さん本人に質問をして話を聞いたのは、非常に貴重な経験になりました。

派遣先のアルバータ大学では、平日は毎日朝から夕方までアニマルサイエンスに関する講義を受けていました。日本と違い、講義中に沢山手が挙がり、学生同士のディスカッションを多く取り入れているスタイルはとても新鮮で、はじめは不安でしたが、慣れると自分の意見とそれに対する反応を聞くのが楽しくなりました。

講義室にいても農場にいても、個人の意見や知識、現象に対する「Why」が最も重視され、常にそれを求められる状況でした。研究を続けていくうえで、この感覚はとても重要になると思います。日本で研究している時よりも、大きな刺激を受けました。学術活動に対するモチベーションは非常に高まったと思っています。



－このインターンシップで一番得たもの

疑問を追求する精神だと思います。カナダでの研修を通して、研究の中だけでなく、講義やセミナーを聴いていて、または教科書を読んでいて浮かんだ疑問に対して、積極的に取り組もうという姿勢を学ぶことができました。また、自分と同じ分野を学ぶ学生に出会えたことも大きな収穫でした。日本の、所属している研究室にいただけではどうしても限られた世界になり、モチベーション低下や視野が狭くなってしまいます。しかし、外に出てみたことで、どんな人がいて、どれだけ沢山の人が自分と同じように学んでいるかを知り、その人たちと話せたことは、今の私の研究を継続しようとする力になっています。時には自分より遥か上のレベルを目の当たりにして自分には届かないようなことがあっても、どうすれば自分がそのレベルに到達するか、冷静に見極めることができるようになりました。



2024年度 インターンシップレポート

－インターン経験を今後どのように生かしていきたいですか？

普段の学術・研究活動に対して生かしていきたいです。特に今回は、実際に現地の農場を視察して話を聞いたことで日本の畜産の課題や、カナダとの違い、さらにそれを通して日本のためにはどうするのがベストな答えなのか、じっくり考えることができました。現地で知り合った人々とのつながりを大切に、日本の問題点を率先して解決していく研究者となるために、今回学んできたことを基に提案ができるようになればと思います。

Prombood Suttida

統合生命科学研究科/博士課程後期/生物資源科学プログラム

Host	アルバータ大学（カナダ）
Period	2024年 9月 30日－10月 31日
Objectives	カナダの教育方法と家畜管理の実践を学ぶ



－派遣先・現地での生活について

Living in Alberta has been a rewarding to my life experience. The local lifestyle is friendly and inclusive, with a strong emphasis on community. People are kind and always willing to lend a hand. Once,



when I needed to attend a class at the University farm, which was far and only accessible by foot, a Canadian classmate kindly gave me a ride in her car. Canadians also value nature and sustainability. I had the opportunity to visit “Elk Island National Park”, where they conserve Bison (American buffalo), large bovines that can be seen grazing in the park. Additionally, I was impressed by the work of beavers in the park, witnessing their ability to fell large trees and build dams. It was thrilling to see these creatures in action, something I had previously only seen in cartoons or documentaries. I also had the chance to visit the “Royal Alberta Museum”, which was the best museum I’ve ever been to. The most amazing part for me was the opportunity to touch a meteorite! that came from outer space. If I ever have the chance, I would love to return and explore more.



－研修内容について

My internship focused on leaning the Canadian teaching methods and livestock management practices. I attended intensive courses, observed innovative teaching strategies such as interactive lectures, group discussions, and the use of visual aids, which inspired me to think of ways to engage students more effectively. Many classes also featured guest lectures, providing students with valuable insights from professionals actively working in the field. Additionally, visits to dairy farms and feed companies allowed me to explore Canadian feeding systems and livestock management practices firsthand. I had the opportunity to speak with Canadian dairy farmers, and it was impressive to learn that many of the farms are family-owned businesses, passed down through generations.



2024年度 インターンシップレポート

Over time, these farms have adopted technology to improve production efficiency. These experiences, combined with adapting to cultural differences, have enhanced my technical knowledge, teaching methods, and problem-solving abilities, preparing me to make a meaningful contribution to the field of animal science.

ーこのインターンシップで一番得たもの

The most remarkable experience was collaborating with a diverse group of students and guest lecturers. The exchange of ideas during classes, field trips, and discussions with researchers broadened my perspectives and enhanced my ability to work in interdisciplinary teams and foster international collaborations. Additionally, the beauty of the fall season in the city, along with the presence of many wild animals, made my time there truly special as the stunning scenery and vibrant wildlife filled my heart with joy, making my experience feel like a dream come true.

ーインターン経験を今後どのように生かしていきたいですか？

My internship provided valuable insights into Canadian teaching methods and farming management, which I aim to adapt for my future academic career. Observing innovative teaching strategies has inspired me to make my own teaching more engaging and effective. Additionally, the knowledge gained from observing dairy farming practices and feed company will influence my future research, helping me implement more sustainable and efficient management techniques.

朱 一妃 / ZHU Yifei

人間社会科学研究科/博士課程後期/国際経済開発プログラム

Host	コロombo大学（スリランカ）
Period	2024年 8月 23日－9月 17日
Objectives	スリランカにおける農薬禁止政策の反転と国内の米小売価格の因果関係を明らかにする

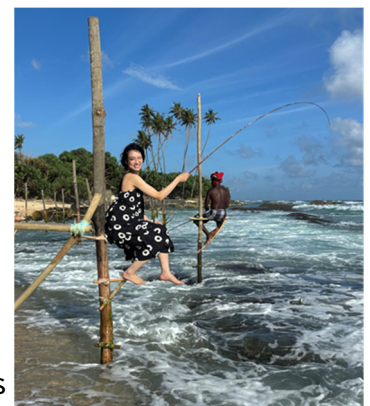
ー派遣先・現地での生活について

Local people show their hospilities all times. They are always warmhearted to foreign visitors, and visitors even will be cordially invited to have meals with local people's family.

The labmate (a girl) in host institution invited me to her home for lunch. Her mother was afraid I wouldn't be used to the local taste, so her mother made a separate one for me. It is a way of expressing friendship. Sri Lankan people are highly inclusive of different cultures and are willing to learn about the cultural background of foreign friends and share their own traditions. Sri Lanka attracts many tourists with its beautiful natural scenery. Every visitor can find peace of mind here.

ー研修内容について

Sri Lanka's plantation economy is dominated by tea, rubber, coconut and rice. From the perspective of rice market, I am motivated to know the impact of agrochemical ban reversal on rice retail prices in Sri Lanka. Most research that studied the effect of the agrochemicals ban on micro (farmers) level, not macro level. Thus, this research presents a complete process from policy promulgation to policy reversal in 2021 and 2022 to figure out the changes of the rice retail prices.



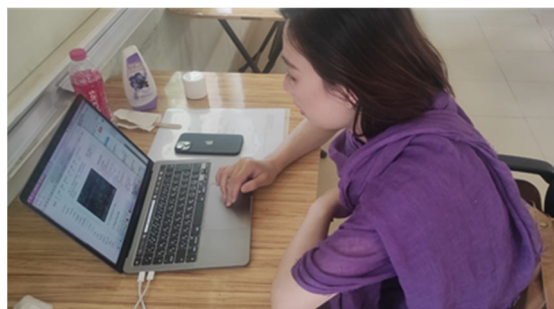
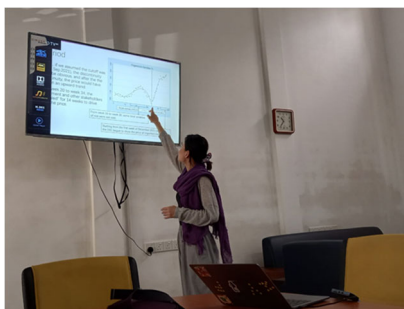
2024年度 インターンシップレポート

ーこのインターンシップで一番得たもの

The necessary condition for studying well is not only academic knowledge. During the internship, I got gastroenteritis and urticaria. On the flight back to Tokyo from Sri Lanka, I vomited twice. At that time, I was in very poor health. The most awesome thing in the life is physical and mental health. Once you have a healthy body, then you can achieve your dreams.

ーインターン経験を今後どのように生かしていきたいですか？

As an important part of my resume, the results obtained in the internship will bring me more competitiveness. Especially for companies doing rural development business, “the actual performance of overseas internship gives the leadership of the company a better idea of what kind of person I am.”



平山 栞菜 / HIRAYAMA Kanna

人間社会科学研究科/博士課程前期/国際経済開発プログラム

Host	フィリピン大学ディリマン校（フィリピン）
Period	2024年 9月 1日－2025年 2月 10日
Objectives	日本の学校とのオンライン交流事業のサポート、フィールド調査を通じた教育開発



ー派遣先・現地での生活について

フィリピン大学では、業務補助と調査の同行、イスラーム教育に関するフィールド調査を行いました。週末は友人（現地の学生）とランチをしながら、日本とフィリピンの文化や価値観の違いについて語り合いました。また、イスラームコミュニティを訪問し、イスラーム教徒の暮らしを肌で感じ、理解を深めました。雨季ということもあり、天候が変わりやすく体調を崩すこともありましたが、温かいフィリピンの人々のおかげで、充実した日々を送ることができました。フィリピンの血族や友愛を重んじる「バヤニハン」精神や「フィリピーノホスピタリティー」といった素敵な文化にも触れることができ、貴重な経験となりました。

ー研修内容について

内容が教育開発であったため、詳細については派遣前に相談させていただきながら決定しました。主な研修内容としては、フィリピン大学の業務補助と調査の同行、また指導の下フィールド調査を行いました。業務補助では、フィリピン大学付属校における日本の学校とのオンライン交流事業の補助を行いました。フィリピン大学は付属校と連携して、コーディネーター兼ファシリテーター役として事業の補助を行っています。私もその一員として、両校間の連絡調整、交流内容の提案、資料作成、事前ミーティング、当日の進行などを行いました。フィールド調査では、イスラーム教育に関する調査を独自に企画し、実施しました。調査対象校の選定、訪問申請、校長や教員へのインタビュー、授業観察など、調査の全過程を経験しました。特に、複数回の訪問を通じて、調査方法を改善し、より深い理解を得られるよう努めました。



2024年度 インターンシップレポート



ーこのインターンシップで一番得たもの

主に2つの貴重な経験を得ることができました。1つ目はフィールド調査を通じて、実践的な調査能力の習得できたこと、2つ目は人々とのつながりが築けたことです。フィリピン大学の業務や調査に携わりながら、自ら調査計画を立案し、実行に移すという経験を通して、実践的な調査能力を身につけることができました。調査の全過程を経験できたことは、今後の研究活動において大きな財産となりました。そして、調査申請の手続きの際に教育省の方に、インタビュー時にはタガログ語への通訳として教員の方々に協力していただき、人とのつながりの大切さを実感しました。

フィリピン大学が主催した国際学会にも参加させていただき、フィリピン大学の方々をはじめ、教育関係者、イスラーム研究者など、多くの方々と交流する機会もあり、研究や調査に関するご助言をいただきました。

ーインターン経験を今後どのように生かしていきたいですか？

フィリピンについて研究してくれてありがとう、イスラーム教徒のことを知ろうとしてくれてありがとう、と言ってくださった皆さんに恩返しができるように、今後の研究に励んでいきたいです。

ーインターンシップ中に心がけていたことはありますか？

深呼吸することを心がけていました。長期ということもあり、月の目標やタスクについては相談しながら決めていましたが、詳細な計画については進捗状況に合わせて柔軟に対応しました。しかし、調査計画やインタビュー内容などに悩み、うまくいかない日が続いた時期があり、周りに心配されることがありました。自分でも気が付かないうちに、焦りや不安は行動に表れていたんだと思います。そんな時、成長しているからこそ、悩み立ち止まることもあるのだと教えていただきました。この経験を通して、計画通りに進まないことや、予想外の困難に直面することは、成長の機会であることを学びました。落ち込むのではなく、うまくいかない時こそ、深呼吸して、焦らず、一歩ずつ着実に進んでいくことが成長への第一歩だと実感しました。

2024年度は9名の学生が海外インターンシップを実施しました(※2025年3月3日時点、渡航予定者を含む)

所属・氏名	派遣先	派遣プログラム
統合生命科学研究科 久富 紫音	アルバータ大学(カナダ)	G.ecbo
統合生命科学研究科 Prombood Suttida	アルバータ大学(カナダ)	G.ecbo
人間社会科学研究科 朱 一妃	コロombo大学(スリランカ)	G.ecbo
人間社会科学研究科 平山 葉菜	フィリピン大学ディリマン校(フィリピン)	G.ecbo
人間社会科学研究科 Hussain Nadia	財務省(パキスタン)	G.ecbo遡上
スマートソサイエティ実践科学研究院 Akter Sadia	特定非営利活動法人IMAGINUS(フィリピン)	G.ecbo
人間社会科学研究科 Khin Khin Phway	カンボジアメコン大学(カンボジア)	G.ecbo
人間社会科学研究科 Pham Van Truong	フィリピン大学ディリマン校(フィリピン)	G.ecbo
人間社会科学研究科 Verra Wulandary	インドネシア教育大学(インドネシア)	G.ecbo遡上



海外インターンシッププログラム(G.ecbo プログラム)の歴史的変遷

海外インターンシッププログラムは、社会の変革・本学の発展により、グローバルに活躍できる人材育成を目指して変化を重ね、拡大し、現在のG.ecbo プログラムへと全学化を遂げました。

～専門エクボの開始～

2001年～

e-ECBO(国境を越えるエンジニア教育プログラム)/
Engineers To Cross Borders (2001-2005年度) の開始 ※工学研と国際研の共同実施

2001年度:技術系学生のためのECBOプログラム試行期
2004年度:ECBOプログラムの本格実施期
(文科省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)への採用」)
2007年度:ECBOプログラム自立期

2005年～

i-ECBO(国際協力学を拓く実践的研究者育成プログラム)/
Explorers of International Cooperation Studies to Cross Borders
の検討と開始

…文科省「魅力ある大学院教育イニシアティブ事業」(2005-2006年度)に採択
※2005年の秋にi-ECBOが採択されたため、2005年の派遣はなし)
2006年～:融合領域(国際協力)のi-ECBOプログラム形成
受入機関の開拓, 学生海外派遣システムの構築, サンドイッチ型教育カリ
キュラムの開発)

～全学エクボの開始～

2007年～

G.ecbo(グローバルインターンシップ推進拠点の形成)/ Formation of a Strategic
Center for Global Internship の開始

・文科省「組織的な大学院教育改革推進プログラム事業」に採択(2007-2009年度)
2008年～:教育改革GP:全学G.ecbo拠点形成
(全学的実施体制の整備, リスク管理体制の強化, プログラム評価体制
の確立, 広報の充実, グローバルインターンシップの実施)

2008年～

G.ecbo遡上教育型インターンシップ(博士課程後期学生対象)/
Follow-up Research Internship の開始

(G.ecbo遡上教育型インターンシップとは; 博士課程前期・後期課程間の教育連携
の促進, 従来型G.ecboプログラム等を通じた活動で得られた知見を深化, 従来型
G.ecboプログラム参加学生の円滑なインターン活動支援)

2010年

(文科省の補助金終了)～

グローバルインターンシップ推進拠点(広島大学自主プログラム)の開始

G.ecbo(国境を越える実践的研究者育成プログラム)/
Global Explorers to Cross Borders

★G.ecboの目的(全学化)…蓄積してきたプログラム推進の人材とノウハウを大学全体の財産として継承し,
組織化すること

2012年～:全学G.ecbo本格自立期
(全学的実施体制の定着, 持続可能な運営体制への移行, 大学院課程との
整合性の向上)

2025年3月

G.ecboプログラムの終了

2025年4月～

海外インターンシップ(グローバルインターンシップ)新体制の運営開始(予定)



2024年度G.ecbo運営委員会 ～ ご協力ありがとうございました ～

運営委員長	マハラジャン・ケシャブ・ラル	大学院人間社会科学研究科 国際経済開発プログラム 教授
運営委員	桑島 秀樹	大学院人間社会科学研究科 人間総合科学プログラム 教授
	上野 貴史	大学院人間社会科学研究科 人文学プログラム 教授
	磯崎 哲夫	大学院人間社会科学研究科 教師教育デザイン学プログラム 教授
	高田 恭子	大学院人間社会科学研究科 法学・政治学プログラム 准教授
	島田 伊知朗	大学院先進理工系科学研究科 数学プログラム 教授
	天川 修平	大学院先進理工系科学研究科 量子物質科学プログラム 教授
	山本 元道	大学院先進理工系科学研究科 機械工学プログラム 教授
	山田 俊弘	大学院統合生命科学研究科 生命環境総合科学プログラム 教授
	藤井 万紀子	大学院医系科学研究科 歯学専門プログラム 教授
	日下部 達哉	IDEC国際連携機構 教育開発国際協力研究センター 教授
	陳 斐寧	森戸国際高等教育学院 准教授

～G.ecboプログラムの終了と新体制でのグローバルインターンシップ開始について～

2007年に全学化され、約18年続いたG.ecboプログラムは、2025年3月末で終了いたします。
2024年度冬季派遣生については、引き続き渡航～帰国まで支援を実施いたします。

2025年度より、海外インターンシップを一元化するべく、IDEC国際連携機構、CGP(Center for Global Partnership)、国際室を中心として、全学的なグローバルインターンシップの運営が開始されます。
この新体制においてグローバルインターンシップワーキンググループを発足し、グローバルインターンシップを推進していきます。

これまで長年にわたってi-ECBO/G.ecboプログラムの運営にあたりご尽力いただいたマハラジャン・ケシャブ・ラル教授をはじめ、運営委員、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

<事務局編集記>

冬季派遣生の派遣手続きより、事務局担当が変わりました。学生とともに、初めての手続きや対応に事務方も奮闘しましたが、安心・安全で実り多きインターンシップを実施する一助になれたかと思うと、大変うれしく思います。歴史あるG.ecboプログラムの最終年度であるこの年に巡り合えたことに感謝するとともに、プログラム修了生を含めて学生たちの成長と今後のご活躍を心よりお祈りしております！



広島大学 国際室国際部
グローバル化推進グループ
G.ecboプログラム
Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo

